

成瀬仁蔵における「自学自動」の教育実践とその意義 — 女子の生活力改善をめざす取り組み —

齋藤慶子*、渡邊巧**

The Significance of Educational Practices “Self-Initiated and Self-Educated,” by Jinzo Naruse:
On Improvement in Women’s Ability to Live

Keiko Saito, Takumi Watanabe

I. 問題の所在

学習者を主体とした学びのあり方は、大正新教育、戦後初期の社会科、生活科、総合的な学習の時間に至るまで繰り返し主張されてきた¹⁾。また、今日では、アクティブ・ラーニング²⁾として、再び脚光を浴びている。学習者の主体的な学びを保障していくことは、学校教育における本質的かつ普遍的な課題と言える。

明治末から大正期にかけての“新教育”という潮流は、アメリカやドイツの影響を受けて、初等教育を中心に広がっていった運動であり、大正期の自由主義的な風潮と結びついて活発に展開した³⁾。例えば、奈良女子高等師範学校附属小学校や成城小学校などが有名である。これらは、画一主義、詰め込み主義的な一方的教授を打破して、子どもの興味関心や体験を尊重し、子どもの生活を中心とした教育のあり方を追究する点に、共通性が認められる教育実践であった⁴⁾。

この時期に、「自学自動」の教育理念を掲げ、教育実践を始めたのが日本女子大学創始者の成瀬仁蔵である。日本女子大学と新教育の関係は、八大教育主張講演会⁵⁾での日本女子大学附属豊明小学校長の河野清丸による「自動教育論」が広く知られている。河野は、モンテッソーリの影響を受けながら、教育論を構築したとされる。一方で、成瀬の「自学自動教育論」が新教育の文脈の中で注目されることは少ない⁶⁾。デューイの影響を受け、初等教育だけでなく中等教育、さらには高等教育までを範

疇にして、自学自動の教育論を展開する成瀬の教育理念や実践は、新教育の文脈の中に位置づけ、捉え直されるべきものである。なぜ、成瀬仁蔵は「自学自動」の理念を掲げ、教育実践を行ったのか。それは、今日においてどのような意義を持つのか。

この問いを考察するために、本稿では、日本女子大学とその同窓会組織（桜楓会）に焦点を当て、成瀬仁蔵における「自学自動」の理念と教育実践を検討していく。

以下の展開で論じていく。第1に「自学自動」の教育理念を説明する。第2に「自学自動」の教育実践の特質を、日本女子大学と桜楓会に注目して明らかにする。第3に成瀬仁蔵における「自学自動」教育の歴史的意義と現代的意義を提示する。検討にあたっては、桜楓会による『家庭週報』（1904年－1951年）、『三つの泉』（1907年）と成瀬仁蔵『新時代の教育』（1914年）を基礎資料とする。また、『日本女子大学四十年史』（1942年）⁷⁾、『桜楓会八十年史』（1984年）等の沿革史も適宜活用していく。

資料のうち『家庭週報』は、桜楓会の設立に際して1904年に桜楓会機関紙として創刊された⁸⁾。本紙は、「成瀬仁蔵の女子教育の理念から社会改良に向かう開かれたジャーナル」⁹⁾として同窓会機関紙の枠を超える役割を担い、「生涯教育の実践」を提示する紙面展開を目指した雑誌であった¹⁰⁾。また、編集に関しては、卒業生が担当しており、「論説から雑報に至るまで一切女子の手によってなされ」た¹¹⁾。このことは、1904年当時としては、画期的なことであったといえる¹²⁾。したがって、『家庭週報』は、

* 日本女子大学教育学科 准教授

** 日本女子大学教育学科 助教

日本女子大学校や桜楓会での教育実践が学生たちにどのように受容され、卒業後の人生に影響を与えたのかを検討していく上で適した資料であると考えられる。

さらに、『新時代の教育』は、文部省に設置された教育調査会の委員に任命された成瀬が、女子教育に限定せず、教育全般にわたる制度及び方法について論じた著作であり、成瀬の晩年の教育理念を検討する上で重要な資料である。本稿では、『成瀬仁蔵著作集』第3巻¹³⁾所収の版を用いて、分析・検討していく。

Ⅱ. 「自学自動」の教育理念

成瀬仁蔵は、『新時代の教育』において、学校教育の目的を以下のように述べている。

各人の自発的動力を開発培養することを目的とする、其の同一の趣旨は、直ちに又教育の方法の原則となる。学校に於ける教育法は、学校内に在りて、既に完成せる所の人物を社会に出すを原則とせず。自ら完成する力を有し、且つ其の方法を知れる所の人物を社会に出すことを以て原則と為す¹⁴⁾。

学校においては、人間を完成させるのではなく、卒業後に、各自が生涯をかけて人間として成熟していくための方法を獲得させることが第一とされている。それは、「生活法」とも言われており、これを「自得」させていく教育のあり方を「自学自動主義」としている¹⁵⁾。生活法の獲得は、学習者自身でしか行いえず、教育は、そのために必要な環境（外的条件）を整えていくことと捉えられている。

成瀬は、自学自動の教育では、学習者自身が生まれ持った能力、すなわち「先天能力の開発」を中心としておこなうとしている。そのためには、学習者の「信念」を涵養することが必要であると。ここで言う「信念」とは、「人の生活を統一する基準、道徳実践の動力たるもの」¹⁶⁾とされている。換言すれば、人が物事を考え、行っていく上での拠り所となるものである。また、「個性」、「創造的能力」、「自動的意志」、「社会性」の涵養といった観点から学習者の資質・能力の育成を行うことも指摘してい

る¹⁷⁾。

「創造的能力」の涵養は、「小学校幼童より、大学の青年学生に至るまで、通じて、創意工夫を重んじ、技能実験の科目に於ては勿論、あらゆる学科、及び学校生活の全面に於て、常に創造性を開発する注意を怠るべからざるなり」¹⁸⁾とし、学校教育全体を通して行われるものとしている。成瀬は、実生活において、「個性」や「創造的能力」を発揮するためには、「自ら判断し、自ら決定し、自ら実行する」¹⁹⁾といった「自動的意思」の修練が欠かせないとし、学習者の主体的な学びを保障していくことの必要性を訴えている。また、「社会性」の涵養をおこなうことで、学習者が世間（社会）に順応しながら、「個性」や「創造性」を発揮できることを志向している。

こうした資質・能力を育成していくために、学生の自治を重んじ、将来に備えた訓練を行わせていたのである。具体的な方法としては、以下のように説明されている。

学校における自治的訓練の方法は、一、学生各個人をして、自己の一身に関する事はなるべく自ら処理し、自己の力によりて、独立的に生活を統制せしむる事、二、学校乃至教師の干渉を避け、なるべく、学生をして種々の事務を負担せしむる方針を採る事、三、学校全体を一箇の自治体と見做し、学生自己の力に依りて其の生活を統制しゆく方針を採る事の三項に分るべし²⁰⁾。

学校において自治活動を奨励することで、「責任の観念を養ふ事」、「権利義務の観念を養ふ事」、「独立心の養成」という目的を達成することを目指していた。このことは、将来の国民（第二国民としての女性を含む）を育成することを意味していたのである。

成瀬仁蔵は、学習者たちに「生活法」を自得させることで、変動する社会において生き抜いていく力を育てようとしていたといえる。こうした自学自動の教育理念は、日本女子大学校全体に通底するものであり、欧米の手工教育・実業的社会的教育といった考え方を取り入れることで、その実現が図られていったのである。具体的な体験を通して、生活法の自得を目指すものとなっている。

以下、日本女子大学校と桜楓会に注目して、女子高等教育における自学自動の教育実践を検討していく。

Ⅲ. 「自学自動」の教育実践—大学校と桜楓会を中心として—

1. 日本女子大学校での取り組み—「科目選択制度」を中心に—

1917年4月、日本女子大学校は、「教授時間数の減少」「修業年限の伸縮」、そして「科目選択制度」の三つを柱とする「新学制」を実施した。新学制の根幹は、科目選択制度にあるとされている²¹⁾。また、『日本女子大学校四十年史』には、「科目選択制度」導入について以下のように記されている。

科目選択制といふことの思想的背景をなすものは自学主義教育論であって、此の主義が本校開校以来の根本的教育主義である以上、此の新制度は、実はすでに開校の当初から敷かれてある制度であった。只従来は、我が国に於ける教育制度一般の発達程度に順応して、必修科目の分量が多く、自由選択科目の割合が少なかった迄である。それを今度は、逆に必修科目の量を最小限度に縮め、選択科目の範囲をできる限りひろげたものである²²⁾。

この記述からは、新学制で採用された「科目選択制度」は、「自学自動」の教育理念の下で開校以来続けられてきた教育実践の「拡充策」と位置付けられていたことが窺える。なお、新学制に伴って、学部編成も変更されている。当時の学部は、家政学部、師範家政学部、英文学部、国文学部であった。以下、本節では、「自学自動」の教育理念に基づいて「科目選択制度」を導入した意義を示し、具体的な実施方法について検討する。

(1) 「科目選択制度」導入の意義

成瀬仁蔵は、「科目選択制度」が導入された1917年5月の『家庭週報』の巻頭言に、「新学期に於ける学生の新生活」という記事を3回連載している。その中で、「科目選択制度」に必要な条件として「自念といふこと、又自動といふこと」を挙げ、「科目選択制度」は「自念の生活即ち信念生活の土台の

上に行はれるもの」²³⁾と位置付けている。前章で検討したように、「信念」とは人間が行動・思考する際の基準、すなわち拠り所である。この点から考えると、「信念」に基づいて、各学生が履修する科目を選択する制度は、日本女子大学校の自学自動の教育理念の実践と位置付けられるものである。

さらに、成瀬は、卒業後の学生の人生も射程に入れて「科目選択制度」の意義を説いている。また、人生においても「信念」や「熱意」がなければ「真の意味の『ものの選択』といふことは出来」ず、「願ひの意志があつて初めて有効なる選択が出来る」ようになると考えている²⁴⁾。そのため、各学生が自己の「信念」に基づいて科目を選択する「新学制」は、学生時代における「自発的活動」を促すことに留まらず、卒業後の人生で岐路に直面した際に「有効なる選択」ができる力を獲得させるという意義を含むものと捉えていたと考えられる²⁵⁾。

(2) 「科目選択制度」の実施方法

「科目選択制度」は、具体的にどのように実施されたのか。既述のように「新学制」は、「科目選択制度」を根幹として、「教授時間数の減少」と「修業年限の伸縮」を伴って実施された。そこで、まず「教授時間数の減少」と「修業年限の伸縮」について検討する。

「新学制」導入以前の教授（授業）時間数は、全学部ともに、「必修科目21時間」と「選修科目7時間」の計28時間であった²⁶⁾。しかし、「新学制」導入以降は、「必修科目」と「選択科目」に大別される科目群から、毎週19時間から25時間の枠の中で、学生各自が時間数を設定して履修するように改められ、教授時間数の削減と学生の裁量が認められるように変更された。履修時間の設定にあたっては、学生自身の「体力学力に応じて科目」を選び、「自学自習の余力」を残した時間割を編成することが勧められた。

この流れの中で、修業年限を学生の能力に柔軟に対応できるようにした。4年制高等女学校卒業を標準的な入学資格とし、本科のみの編成で3年から4年に修業年限が改められた。学則第十九条によって、「各科各部の科目は之を四ヶ年に配当するも、学力優秀にして本校所要の学業を修了し得る者は三ヶ年にて卒業することを許可す。」となり、「普通の学生は四ヶ年」で、「学力体力共に優秀な者に於

表 1 必修科目群の一覧

	科目名	履修年次	時間数/週	備考
全体必修科目	実践倫理	1 - 3年	2	
	体操	1 - 3年	2	
部分必修科目	倫理学	2 - 3年	2	
	心理学	1年	2	
	国語	1年	2	5年制高女卒業生は免除
	英語	1 - 2年	3	

（中村政雄編『日本女子大十周年史』日本女子大十周年、1942年、p.179をもとに筆者ら作成）

表 2 選択科目群の一覧

主専攻科目 (8 - 12時間)	家政学部	副専攻科目 (4 - 8時間)	文科	教育学部	自由選択科目	主要の役目
	師範家政学部			哲学部		
			英文学部			
			文学部	史学部		興味分配
英文学部	社会学部	興味集注の補助				
	美術学部					
国文学部	理科	数学部	興味分配			
		理化学部				
		博物学部				
	実学科	家政学部	興味集注の補助			
師範家政学部						
体育部						
			農芸部			
			商業部			

（中村政雄編『日本女子大十周年史』日本女子大十周年、1942年、pp.179-186をもとに筆者ら作成）

ては三ヶ年」で卒業できるようになった²⁷⁾。

このような大幅な学則改訂を必要とした「科目選択制度」であるが、実施に当たっては「本校の実状を参酌し、之に最も適応する進歩的な方法」として、「純粋な科目選択制度」ではなく「部分選択制度」が採用されることになった。部分選択制度とは、「全体必修科目」と「部分必修科目」からなる「必修科目」群と「主専攻科目」「副専攻科目」「自由選択科目」からなる「選択科目」群で構成されている。その内実は、表1および表2の通りである。

まず、「全体必修科目」は、全学年1週2時間、計4時間を履修する。「部分必修科目」は、1年次で1週7時間、2年次で1週5時間、3年次は1週2時間を履修することになっている。したがって、必修科目として1年次11時間、2年次9時間、3年次6時間を履修することが義務付けられている。

そして、選択科目は、上限25時間から必修科目の履修時間数を除いた時間数の範囲内で、「主専攻科目」「副専攻科目」「自由選択科目」の中から、各学生が所属する学部の規定に沿って履修科目を選択していくこととなる²⁸⁾。このうち「主専攻科目」は、学生が所属する学部と同じ区分となっており、各学生は自らが属する学部が指定した「科目」を履修する仕組みとなっていた。一方、「副専攻科目」については、必ずしも全員が履修する必要はなく「各学生の要求と適不適に参照して或は主専攻科目のみを選択²⁹⁾」することも可能であった。「自由選択科目」は、「多方面の興味を養はしむる」ことを目的としており、専門分野以外に目を向けさせ、学生の「実際生活に多少の不利を招く憂」を払拭するために設けられた³⁰⁾。

このように、日本女子大十周年では、成瀬仁蔵が掲

げた「自学自動」の理念の下に、教育課程が編成されていた。以上の取り組みは、正規の教育課程だけでなく、課外活動や卒後教育（生涯学習）の場と連携しながら実現が目指されていたのである。その中心を担っていたのが、桜楓会であった。

2. 生涯学習機関としての桜楓会

(1) 桜楓会の組織

桜楓会は、日本女子大学の同窓会組織であり、当時の在学生たちの発案により、成瀬仁蔵を会長とし1904年に設立された。この会は、規約の第2条において、以下の3点を目的として掲げている。

- 一、会員の交情を厚くし、知識を効果し、相助け、相励み、永久に相互の進歩発達を計る事。
- 一、本会の三幹部たる家庭部、教育部、社会部の研究と、其活動により、社会改善に資する事。
- 一、会員と本校との関係を親密にし、本校の事業の発達を助成せしむる事³¹⁾。

このように、卒業生（女性）たちに生涯学習の場を提供するものとなっている。

設立当初の桜楓会組織は、図1のように示すことができる。本部のもとに、3つの研究部が組織されている。また、仙台、名古屋、大阪、広島、九州等の8地域には支部が置かれている。

研究部は、家庭部・教育部・社会部の3部に分かれている。社会部には、実業部・出版部等が置かれており、さらに実業部は、書籍部・雑貨部・銀行部・製菓部・園芸部・牧畜部の6部に分かれている³²⁾。

会員たちは、家庭部・教育部・社会部のいずれかに所属し、相互の協力によって、理論を用いたり実験を行ったりすることによって、研究を進めていたとされる³³⁾。所属員が、それぞれの研究関心を探究していくことが目指されている。なお、各研究部では、時々、会員宛に研究問題と回答用紙を送付し、各地の会員に見解を求めることもあったという。

家庭部は、家庭における「衣食住、育児、経済、道徳、社交、趣味、衛生、教育、公共事業」³⁴⁾をテーマとして、家庭の状況を調査し、改善策の提案をおこなっていた³⁵⁾。明治末から大正初めに『家庭週報』に掲載された家庭部による記事を紐解いて

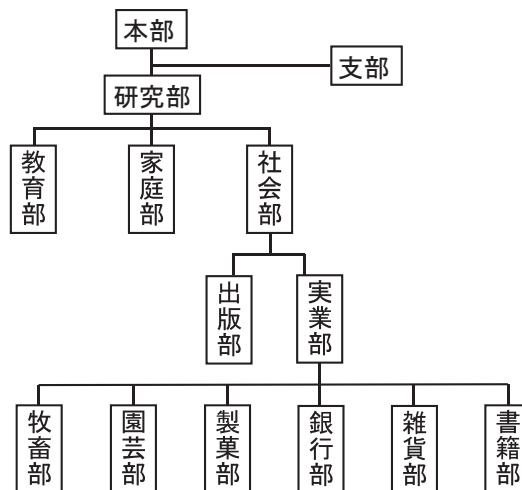


図1 創設期の桜楓会組織 (筆者ら作成)

みると、衣服に関する「小児の遊戯服（オールオヴァー）」（第117号、1907年10月）や「衣服に就いての知識」（第174号、1909年1月）、育児に関する「生母の乳なき小児は如何にして育つべきか」（第143・144号、1908年5月）、趣味に関する「色の配合と婦人の趣味」（第140号、1908年4月）、衛生に関する「バクテリアの話」といった生活改善を意図する記事が多く見受けられる。また、桜楓会会員から寄せられた「主婦の家庭に於ける状態（某桜楓会員の家庭）」（第102・103号、1907年6月）や「家庭経済につきて桜楓会員の経験談」（第136・137号、1908年3月）といった記事からは、その時々々の家庭状況を調査するという家庭部の活動の一端を垣間見ることができる。

教育部は、幼稚園・小学校から大学までの教育をテーマとして、それについて「直接教鞭を執れる会員及び教育志望の会員と共に研究会を組織し互に得たる経験を交換し、或いは方法に就きて考究」³⁶⁾し、当時の「教育の欠点を調べ、これを改革してよき国民を育てること」³⁷⁾としていた。『家庭週報』には、「良き校風は如何にして養わるるか」（第187号、1909年5月）、「モンテッソーリ女史の教育法」（第217 - 226号、1913年4 - 6月）といった記事に加え、学校教育の視点から家庭教育への示唆を与える「幼稚園の教育と家庭の教育と」（第147号、1908年5月）などの教育部による記事が掲載されている。学校現場における経験を共有し、具体的な教育方法について検討していくものとなっている。

社会部は、「日本婦人に実力と地位を興へる方法を實際上より研究すること等」³⁸⁾を目的として活動した。桜楓会の設立当初は、計画段階に留まっていたが、後に整備された。社会部の中心は、実業部であり、「人格完成の一助として経済的品性の陶冶を計り、創始力組織力を養ひ、傍ら犠牲労働の精神を養うこと」を目指しており、成瀬の助言と広岡浅子の協力によって設置が行われた³⁹⁾。

実業部における書籍部・雑貨部・銀行部・製菓部・園芸部・牧畜部は、それぞれが、女性たちに実生活に必要な知識や技能を自得させるものとなっている。ここでの活動は、『家庭週報』でも体験談や報告が、数多く掲載されており、桜楓会において、中心的な役割を果たしていたものと推察できる。具体的な活動内容やその体験談については、次項で検討をおこなう。

(2) 実業部における教育実践

桜楓会における教育実践は、既述のように実業部が中心である。実業部は、その名称に表れているように、「実業教育」をおこなう場となっている。成瀬仁蔵によれば、ここで言う「実業教育」とは、「商工技術、工芸等の所謂実業教育と、大に其主義を異にするものあり、即ち Industrial Social Education を意味するものにして、我日本女子大学の教育主義とする所」⁴⁰⁾としている。「実業的社会的教育」(Industrial Social Education)とも言い換えられており、「工場の社会的、家庭的要素を具へしむるもの、文学も之に加はれり、商工、手芸も之に加はれり、音楽美術も凡て之に包含」される言う。これによって、「智育、情育、徳育、体育」を学び、「自ら之を実行して、自ら理解力、選択力、創造力、発明力及び観察力を養」うことが目指されている⁴¹⁾。

1905年9月25日、桜楓館開館式にあたって、成瀬仁蔵は実業部の目的について次のようにも述べている。

実業部の目的には色々あるが重なるものは我が校の教育の中に経済的要素、実業的要素を加える都いうこと、我が国の教育に自営独立の精神を吹き込むというにあって之を為すみは労働を貴び職業を重んずるといふ風を養わなければならない。会員は皆襟を掛けて喜んで労働に服したのであります。その働きは未だ微々たるもので

あるが、兎も角も其の働きに依って昨年は十七人計り、今年は二十二名計りの自給生を養うことを得たのである⁴²⁾。

桜楓会会員と学生の経済的思想を涵養し、労働を重んじて独立自営の校風を育むことに加え、「自給生」を経済的に支援する活動として実業部を位置付けていたことが分かる。このことは、「今ではアルバイトは普通のことになりましたけれど、その頃世間では珍しいことでした。私は学生の時はお手伝いさんの助手をしました。……あの頃実業部でアルバイトをした方は割り合い多かったのですよ。……世間では働くことをいやしめるような風潮でしたけれど、この学校ではさすがにみんなよく理解していました。」⁴³⁾という卒業生の言葉からも確認することができる。

では、桜楓会実業部は、具体的にどのような活動をし、在校生がどのようにかかわっていたのか。『家庭週報』に掲載された実業部関係の記事から、実業部における書籍部・雑貨部・銀行部・製菓部・園芸部・牧畜部の活動をみていくと、体験活動を通して女子の社会に対する見方・考え方を育てる書籍部・雑貨部・銀行部と、実験・観察を通して女子の自然に対する見方・考え方や精神性の陶冶を目指す製菓部・園芸部・牧畜部と大きく二つに分けて考えることができる。

まず、社会に対する見方・考え方を育てるために、書籍部・雑貨部・銀行部では具体的にどのような活動を行っていたのか。書籍部では「諸種の教科書は勿論参考書、雑誌、其他適當の読物を選択紹介して販売」を、雑貨部では「文房具小間物化粧品日其他一切の日用品」の販売を行っており、書籍部と雑貨部は、商業部とも称されていた⁴⁴⁾。また、雑貨部の収入によって、「実業部全体、及びバザー資金の運転」が計られており、資金面において、実業部の中で重要な位置づけであったことが窺える⁴⁵⁾。銀行部は、「生徒の父兄より送らるる学資金、並に他の各部の収入金を預り、又各部に要する資本を貸し出す」といった活動をしていた。女子の「貯蓄心を養うこと」や「銀行とは如何なるものなのか、小切手は如何に用ゆるべきものなのかを、実際に会得」させることも目指されていた⁴⁶⁾。

一方、自然に対する見方・考え方や精神性の陶冶

を目指す製菓部・園芸部・牧畜部はどのような活動を行っていたのだろうか。製菓部は、「食パン及び菓子の製造法を研究して衛生上適当の食品を作り、「教職員並に通学生の昼食」として販売することを目的とし活動していた。また、食パンや菓子の製造については「生徒の望みのより実習せしむ」とあり、女子大学校在校生が実地に学ぶ場としても活用されていたことが窺える。園芸部は、3000坪の野菜畑を有し、「野菜、果物、花卉、その他種々の植物を培養」していた。収穫した野菜や花は、校内寮舎の台所や花壇に役立てられるだけでなく、「植物学」用の標本作成や、「実地の観察によつて自然に対する趣味を養う」ことにも活用された。さらに、牧畜部は、「牛、豚、鶏、蜜蜂、魚類、其他の動物を飼養して、之より得る新鮮なる乳汁、肉、蜜蜂等を校内の需要に供する」ことを目的とするとともに、「動物学の実地研究の場所となし、兼て体育の一助」となるような活動が展開された⁴⁷⁾。

初期の『家庭週報』では、園芸部や牧畜部の活動がしばしば紹介されている。たとえば、指導者を擁せずにはじめられた牧畜部の養鶏に関する以下の記事からは、桜楓会の会員が自らの観察力・研究心をもって飼育に当たっていたことが窺える。

鶏屋の経験談を聞きたる他は書物を研究し実際に観察して、六十羽の雛を孵化し、唯今では十羽に一羽の親鶏を付けて、私共が石油箱を利用して種々工夫して手製しました雛箱の中に、まことに壮健に發育して居ります。……此事業を一度始めますと、私共は朝起きの習慣、労働勤勉の習慣、清潔の習慣、時間を守る習慣、又私共に最も欠けて居ります経済思想、観察力、注意力が不知不識の間に養はれて、常に研究心を以て動植物に関する新知識、または其他の實際上の知識を養ふ事が出来ます⁴⁸⁾。

さらに、養鶏事業によって「運動も適宜に出来常に心が爽快」になるため、「その結果は自然に私共の健康に現はれ……身体が壮健」になるとして、「養鶏事業は確かに私共の知育体育道徳あづかに与つて大いに力ある事」と捉えている。

また、『家庭週報』第5号-第7号に掲載された「蜜につきて」という牧畜部養蜂事業に関わる記事

では、蜜蜂を「毎朝巣箱の掃除の後一時間か又は夕刻一時間或は夜分三十分位」観察し、その生態を解明しているだけでなく、蜜蜂の性情について「蜜蜂の勤勉貯蓄の精神」「蜜蜂の経済的精神」といった6つの観点から考察し人間の精神への教訓を得ている。実業部における活動は、女性たちに、実生活上で必要な知識や技能を、体験(実践)の中で自得させていくものとなっている。

『家庭週報』では、こうした実業部における取り組みの効果を3点でまとめている⁴⁹⁾。第1は、「女子の品性修養」である。以下のように記述されている。

教場でただ経済学の原理を学んだばかりでは決して其目的を達せられるものではなく矢張実地に当つて、数多の経験を積み、始て経済といふ事を知り、且つ其を実際に行つて後に、私共の経済的品性も養はれるのです⁵⁰⁾。

学んだ理論を生活の中で実践することによって、はじめて学問を自得できると捉えられている。さらに、「実践躬行を重んずる、道徳的品性」をも養うことによって、「勤勉貯蓄の精神をも奮起」できるとしている。

第2は、「女子の向上精神」の修養である。「昨日より今日、今日より明日と段々進歩してなるべく」考え、行動していく態度を意味している。記事では、書籍や講義を通して、向上精神の重要性は理解していたが、それを実際に養う方法が分からなかったとしている。こうした方法の体得に、実業部での経験が一役買っている。

第3は、「女子の体育」を計ることである。早朝に起床して四季折々の草花を眺めながら、その世話をする園芸や、可憐な雛の發育を日々観察できる養鶏に関する労働は、普段なら「女子には随分困難と思ふ労働」でも、「余り意とせず」に身体を動かすことを可能にさせる。そのため、「心身共に壮健」になり「充分是を以て体育の目的を達せられ」と述べ、実業教育は女子の体育にも資すると主張している。この他にも、「常識」を養うことや「理性を発達」させること、「意志を強固に」する等の効果があったと記述されている。

成瀬仁蔵は、実業部(実業教育)によって、女性が実生活(家庭生活、勤労を含む)を送る上で、役

立つ学びを保障しようとしていたのである。『家庭週報』の記事を見る限り、そうした理念は、会員たちにも共有されていたと考えることができる。

(3) 桜楓会の思想的背景

桜楓会は、なぜ研究部を家庭部、教育部、社会部の3部で構成していたのだろうか。

成瀬仁蔵は、家庭・学校（教育）・社会を、「人類生活の三制度」と評し、「各自密接の関係を有するものにして、三者は、各互に三者の特質を備うるもの」と捉えている⁵¹⁾。それは、以下の成瀬の言葉からも窺い知ることができる。

家庭は吾人の経べき最初の社会にして、何人と雖、必ず経験する処なり。この家庭はやがて延長して学校という社会となり、一層延長して国家社会となる。また家庭は最も大切な人生の基礎となる学校なり。……学校は一つの家庭なり。国家社会はまた一つの大なる家庭にして一つの国土のもと、法律のもとに業を営む国民は兄弟にして、王者は父なり。以上の三者は社会を構成せる最も大切な制度にして、この三つの制度は各文明に貢献する理由となるべき理想の上に建てらる⁵²⁾。

したがって、生涯学習の場としての桜楓会においても、この家庭・学校（教育）・社会を基本として、研究・修養を進めていたと考えられる。

こうした桜楓会のあり方は、桜楓樹（図2）という形で視覚的にも表現され、共有化が図られていった。桜楓樹は、「本会の目的を達する方法を具体的に現はしたるもの」⁵³⁾であると同時に、「真善美を表徴する」⁵⁴⁾ともされている。渡辺英一（1908年から日本女子大学教授に就任し、国文学、実践倫理等を担当していた教授）は、「学校は先生の求める真女性の内的修養、桜楓会はその外面的実現で、即ち先生が理想の実現は、桜楓会によって成就する。」⁵⁵⁾と述べており、成瀬が桜楓会によって女子教育の目的が達せられると考えていたことが分かる。

桜楓樹は、以下のように説明されている。

即ち会の本部を幹とし、此の幹は家庭部、教育部、社会部の三大枝に分る。各枝は更に数多の

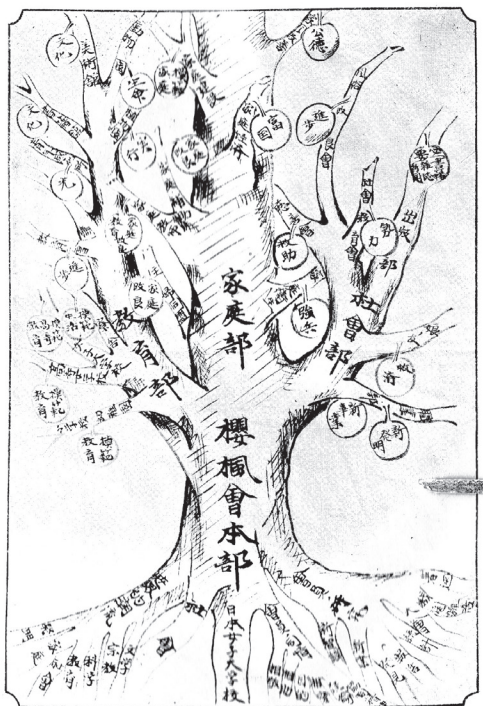


図2：創設期の桜楓会組織

（桜楓会編『三つの泉』桜楓会出版部、1907年、より掲載）

小枝を出せり。其の枝端に累々たる果実は、即ち此の樹木が、花咲き、実を結べる有様を現はせるものなり。根はまた各方面に分れて深く蔓り、此樹木を風にも嵐にも堪へしむると共に地中より養分を幹に送る幹たる会の本部は、根本より来る養分を吸収して、これを三大枝より、各末梢に送りて、枝葉を繁茂せしむ。各枝葉は空气中より窒素を吸収してこれを根幹に送る。互いに相助け、相養ふこれ桜楓会の精神に外ならざるなり⁵⁶⁾。

桜楓樹では、桜楓会本部を中心として、家庭部が柱となり、左右に教育部と社会部が配置されている。このことから、あくまで女性の活躍の場は家庭が基本であると考えられていたことが窺える。

桜楓樹の根には、「日本大学校、社会、世界的潮流、会員の同情、会員の研究」が位置づけられている。会員の研究とは、既述の研究部における活動が該当する。

そして、桜楓樹には、それぞれの部における活動を通して、女性たちに追求して欲しいことが、実の

形で示されている。例えば、家庭部は「公德、富国、家庭改良、模範家庭」等である。教育部は「文化、生命、進歩、模範教育」等である。そして、社会部は「新発明、必要、救助」等となっている。成瀬は、女性たちに獲得させたい資質・能力を、概念（桜楓樹の中では実）の形で捉えることで、桜楓会における教育目的・教育内容・教育方法を明確なものとしていたのである。このことは、桜楓会の研究部における活動が、会員各自の生活をより良くしていくために有意義であることを自覚させるものとなっており、桜楓会が、いわゆる同窓会ではなく、意図的な教育機関として組織されていたことを示している。

成瀬は、実生活において、生きて働く知識の自得を女性たちに求めるだけでなく、女性たちの自学自動の学びを、生涯にかけて支えていく仕掛け（＝桜楓会）を作り出していたのである。ここでは、女性の生活力改善をめざすことが意図されていた。

また、学校での学びが実生活で役に立たないと思われる現状を踏まえ、そうした一般常識を打ち破ることも目指されていたと考えられる。成瀬が、教育機関（初等教育から高等教育迄）での学問（科学）と実生活の乖離について、問題視していたことは、以下の記述からも分かる。

我校に割烹を教ゆるも啻に魚鳥 菜の調理を学び、煮焚の法を知るに止まらず、理化学応用の能力を啓発し、衛生、経済の工夫も、自から実験によりて会得せしめ又牧畜、園芸によりても、動植物発育の実際と生物進化の状態を不知不識の間に理会せしめ、微妙なる天然の法則も、之に由て其一班を会得せしむるなり。……今日多くの青年子女が、其学校を離れて、実際の生活に入るや、学生時代に於ける優秀なる俊才をして、其学べる所と実際の余りに甚だしく懸隔するに驚き、踏跣逡巡其才能を用ゆるに所なきを嘆じ、遂に自ら期せざるの邪徑に陥り或は空しく厭世の悲境に沈ましむるに至る⁵⁷⁾。

成瀬仁蔵の取り組みは、大正新教育期の自学や自動といった教育のあり方が色濃く反映されているだけに留まらず、生活改善運動とも深く結びついたものとなっている。

日清戦争後の社会においては、国の基礎単位に「家」が位置づけられ、「家」を内側から支える役割が、女性に求められていた。成瀬に限らず、当時の女子教育論は、こうした動向を受け、妻・母として家庭内で果たす役割や価値観を育てていくことを主張していた。しかし一方で、当時の世間一般の父母たちは、単なる家事能力や伝統的な婦徳の養成を期待していた。女性が、自らの判断のもと自律的に家事や子育てをこなすことを期待する良妻賢母思想にのっとりた教育実践を実施することは難しい時代でもあった。

実際、1890年代から1900年代にかけては、女子教育不要論がまだ根強く存在し、高等女学校ですら家事の出来ない「生意気な」女を創り出している教育機関として批判されていた⁵⁸⁾。こうした時代の中で、家庭内に留まらず、女性たちの目を世の中へも向けようとしていたこと、さらには、それを理念として語るだけでなく、日本女子大学校や桜楓会という形で結実させ、実践していたことは、特筆すべき点といえる。

IV. 成瀬仁蔵における「自学自動」教育の意義

なぜ、成瀬仁蔵は「自学自動」の理念を掲げ、教育実践を行ったのか。それは、今日においてどのような意義を持つのか。これが、本稿における問いであった。学習者の主体的な学びを保障していくことは、教育における普遍的かつ本質的な課題である。

成瀬仁蔵は、「生活法」という各自が生涯をかけて人間として成熟していくための方法を自得させる教育、つまり「自学自動」の理念を掲げて日本女子大学校での教育を展開させた。教育とは、学習者が生活法を獲得するために必要な環境を整えていくことと捉えていた成瀬は、大学校のカリキュラムとして幅広い副専攻科目を整備するとともに、卒業後の学びを支えるために桜楓会の組織化と多岐にわたる活動の展開を推進した。また、副専攻科目群「実学科・農芸部／商業部」に置かれた科目は、桜楓会実業部の活動との連続性を想起させるものである。以上のような成瀬仁蔵の教育実践は、学校の枠に留まらず家庭や社会をも範疇に入れた取り組みとなっていたことが分かる。日本女子大学校、とりわけ桜楓

会における取り組みは、学校教育での学びを実生活に結びつける働きを持っていたと考えられる。

学校教育での学びを、社会に位置付けていくという発想は、今日の教育現場の問題意識とも通ずるものである。例えば、日本女子大学人間社会学部教育学科でも、こうした理念を踏まえて、アクティブ・ラーニング科目を設置し、教育実践を行っている。筆者らが担当する「プロジェクト実践演習」等が該当する。この科目は、学生と教員が協働して、企画の立案・実施を行っていくものである。こうした活動的な学びだけでなく、講義系科目においても、学習者の主体的かつ深い学びを促す試みも行っている。

成瀬仁蔵の教育実践は、女子高等教育としておこなわれたものである。当時の女子高等教育は、高等教育とはいえ、男子のそれとは異なり、女子の主な活躍の場を家庭と想定した中での教育であった。だからこそ、家庭生活に軸を置きながら、社会に向けた視野を育むものとなっていたのである。こうした取り組みは、学習者の「自立」を促し、家庭や社会で生き抜いていく力を育てるものとなっていた。女子高等教育としても注目されるが、今日からみると、初等・中等教育、とりわけ生活科や総合的な学習のあり方を考えていく上でも示唆を持つのではないか。

注

- 1) 社会科教育（戦前の社会系教科を含む）の史的展開については、以下の文献に詳しい。片上宗二・木村博一・永田忠道編『混迷の時代！“社会科”はどこへ向かえばよいのか』明治図書、2011年。
- 2) 本稿では、「学生が他者と関わりながら、対象世界を深く学び、これまでの知識や経験を結びつけると同時にこれからの人生につなげていけるような学習」を意味し、子どもの資質・能力を育成しようとするものと捉えている。詳細は、松下佳代・京都大学高等教育研究開発推進センター編著『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房、2015年、を参照されたい。また、アクティブ・ラーニングをめぐる研究動向については、細尾萌子「アクティブ・ラーニングをめぐる研究動向」日本教育方法学会編『アクティブ・ラーニングの教育方法学的検討』図書文化、2016年、pp.188-201、に詳しい。
- 3) 大正新教育については、以下の文献に詳しい。中野光『学校改革の史的現像』黎明書房、2008年。橋本美保・田中智志編著『大正新教育の思想』東信堂、2015年。
- 4) 「自学」や「自動」といった教育理念に注目した先行研究としては、以下の文献が挙げられる。これらは、初等教育を対象としたものとなっている。永田忠道「大正自由教育期における地理授業改革－初等学校段階の場合－」『社会科研究』第49号、1998年、pp.61-70。深谷主助『近代日本における自学主義教育の研究』三省堂、2011年。前田一男「自由教育実践者としての鈴木源輔－千葉県師範学校附属小学校時代を中心に－」『立教大学教育学科研究年報』第55号、2012年、pp.27-53。
- 5) 八大教育主張講演会とは、日本学術協会の主催により、1921年8月1日－8日まで東京高等師範学校講堂で開催された講演会であり、「八大教育主張」は大正新教育を象徴する議論である。樋口長市、河野清丸、手塚岸衛、千葉命吉、稲毛金七、及川平治、小原國芳、片上伸が、それぞれ個性的な教育論を唱え、全国の教育者に影響を与えた。
- 6) 日本女子大学の創立者である成瀬仁蔵や日本女子大学の教育理念を、女子教育の文脈で検討する先行研究が多い。例えば、以下の文献が挙げられる。井上信子・前典子・高橋かほる「教職実践演習（幼稚園）－日本女子大学の教育理念・シラバス作成の背景・初年度授業の実際－」『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第21号、2015、pp.135-150。影山礼子『成瀬仁蔵の教育思想』風間書房、1994年。佐々木啓子『戦前期女子高等教育の量的拡大過程』東京大学出版会、2002年。中野邦『成瀬仁蔵研究』ドメス出版、2015年。真橋美智子「成瀬仁蔵の女子高等教育における家庭、職業」『人間研究』第51号、2015年、pp.15-21。この他に、片桐芳雄による一連の研究も注目できる。例えば、片桐芳雄「成瀬仁蔵の魅力」『人間研究』第48号、2012年、pp.16-17、がある。
- 7) 中村政雄編『日本女子大学四十年史』日本女

- 子大学校、1942年。
- 8) 1904年3月1日から16日まで、『家庭週報』の前身である「女子大学週報」が発行されている。創刊号は、B4版で8頁、定価は3銭であった。休刊・再刊・復刊を経ながら、1951年4月15日発行の第1633号まで発刊された。(渡辺美保『『家庭週報』の変遷』中寫邦監修『女性ジャーナルの先駆け』日本女子大学教育文化振興桜楓会出版部、2006年、p.17、参照。)
- 9) 中寫邦『『家庭週報』年表によせて』中寫邦監修『女性ジャーナルの先駆け』日本女子大学教育文化振興桜楓会出版部、2006年、p.12。
- 10) 同上書、pp.6-15。
- 11) 前掲書7)、p.107。
- 12) 詳細は、以下の文献に詳しい。中寫邦『成瀬仁蔵研究』ドメス出版、2015年、p.237。
- 13) 『成瀬仁蔵著作集』第3巻、日本女子大学、1981年。
- 14) 同上書、p.148。
- 15) 同上書、p.149。
- 16) 同上書、p.151。
- 17) 同上書、pp.159-168。
- 18) 同上書、p.162。
- 19) 同上書、p.164。
- 20) 同上書、pp.170。
- 21) 「学制改革内容(一) 将に大学生生活の真価を見ん」『家庭週報』第409号、1917年3月3日、1面。
- 22) 前掲書7)、p.177。
- 23) 成瀬仁蔵「新学期に於ける学生の新生活(二)」『家庭週報』第418号、1917年5月25日、1面。
- 24) 成瀬仁蔵「新学期に於ける学生の新生活(三)」『家庭週報』第419号、1917年6月1日、1面。
- 25) 前掲書23)、1面、および前掲書24)、1面、参照。
- 26) 前掲書7)、pp.75-79、参照。
- 27) 同上書、pp.177-183、参照。
- 28) 同上書、pp.177-183、参照。
- 29) 「学制改革内容(二) 新しき試みに伴ふ責任の自覚を要す」『家庭週報』第410号、1917年3月30日、1面。
- 30) 同上書、1面。
- 31) 桜楓会編『三つの泉』桜楓会出版部、1907年、p.66。
- 32) 1907年の『三つの泉』では7部(養鶏部を含む)が記載されている。しかし、1904年7月23日の『家庭週報』第3号では、6部となっており、設立当初の段階では、養鶏事業は計画中となっている。
- 33) 前掲書31)、pp.78-79。
- 34) 同上書、p.79。
- 35) 前掲書7)、p.468。
- 36) 前掲書31)、p.79。
- 37) 前掲書7)、p.56。
- 38) 同上書、p.467。
- 39) 同上書、p.468。
- 40) 「我校の教育方針に就て」『家庭週報』第20号、1905年3月25日、6面。
- 41) 同上書、6面。
- 42) 桜楓会八十年史出版委員会編『桜楓会八十年史』桜楓会、1984年、pp.59-60。
- 43) 同上書、p.60。1968年11月4日に桜楓館でインタビューされた家政学部第5回卒業生・田村なかの談。
- 44) 「実業部の組織及び状況」『家庭週報』第3号、1904年7月23日、3面。
- 45) 「桜楓会の一大発展」『家庭週報』第80号、1906年10月27日、4面。
- 46) 前掲書44)、3面。
- 47) 同上書、3面。「園芸部の昨今」『家庭週報』第3号、1904年7月23日、5面。
- 48) 「養鶏に於ける初体験(つづき)」『家庭週報』第2号、1904年7月9日、5面。
- 49) 「実業部における実験」『家庭週報』第9号、1904年10月15日、5面。
- 50) 同上書、5面。
- 51) 前掲書31)、p.22。
- 52) 同上書、pp.22-23。
- 53) 同上書、p.73。
- 54) 前掲書7)、p.466。
- 55) 渡辺英一「先生と桜楓会」渡辺英一編『日本女子大学校創立者成瀬先生』桜楓会出版部、1948年。
- 56) 前掲書31)、p.73。
- 57) 前掲書40)、6面。
- 58) 小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房、1991年、pp.41-60、参照。

